
ボツだもの宣言 その1

柳 大知

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボツだもの宣言 その1

【Nコード】

N5503F

【作者名】

柳 大知

【あらすじ】

ボツネタだけどネタが無いので書いてみた。500文字くらいの
を二編載せるつもりが、意外に指が動き一編に、ほぼ実話…

俺の名は灯牙^{とうが}。よく珍しい名前って言われる。
さて、俺の馬鹿げた話を聞いてくれ。
さっき俺は夕食を作っていた。

今日はカルボナーラに初挑戦してみた。具はベーコンのみ。
なんとか無事に出来上がったが、ソースがちょっと失敗して卵が
形を現してしまった。

でも味は悪くなく一人でそいつを食べていた。
しかし、皿の上の物を半分くらい減らしたところで味が淡泊に感
じてきた。微妙に量が多かったのも原因だろう。俺はもう一つ別の
要素が欲しくなった。

緑の香草か、ブラックペッパー、そんなモノを求めテーブルから
3秒で移動できるキッチンの棚を開けた。

だが、そこに望みのものは無く、変わりに見つけたのは、赤いと
うがらしだった。

悪くは無い、ピリつとしたアクセントになるだろうと思い、それ
が入った袋を取り出した。消費期限は……大丈夫。

とりあえず包丁で細かく切ろうと思い半分に、小さな種が沢山飛
び出してきたんで驚いた。

実はとうがらしを調理に使うのは初めて、何で棚にあったか知ら
ん。

しかしこれ、小さくて切りにくい、4等分にしたところでとりあ
えずテーブルに戻り、四つの欠片を皿に乗つけてみた。そしてその
中で二番目に大きい欠片をフォークに絡めた麺と共に口に運んでみ
た。

単調になつていた味にとうがらしの辛さが加わる。なかなかいいぞ、と思つた矢先。口の中に赤い欠片だけが残っているのが分かつた。奴は俺の口の中を気に入つたらしい。

そんな馬鹿なことを思いながら、そいつを吐き出し指先に。噛み切れない、もつと小さくしなくては、そう思つて3秒で移動、まな板の上にポトリ。

華麗な包丁さばきで細かく叩いてやろうと奴に挑んだが見事に敗戦。包丁が悪いのか、全然切れやしない。

俺はまな板から欠片を回収し、皿の前に戻つたが、どうにもイラつとして、奴を指で潰してやつた。それが奴の弱点だつた。奴は粉々に砕け、パウダー状になりパスタに絡まつた。残つていた欠片もすべてそれで攻略してやつた。

若干辛かつたが、なかなか美味かつたので満足。皿を空にしたら次は風呂と決めていたので俺は風呂に向かおうとした。だが待て、薄々気付いていたが、唇が痛い。奴め食われた腹いせに置き土産を残していきやつたか……

いやいや……とうがらしの辛さをなめていた俺が悪い。

俺は咄嗟に冷凍室を開け、氷を取り出し唇に当てた。

そうすることで和らぐ痛みの方が問題だつたので、指先の冷たさは無視した。

氷を当てながら、脱衣所へ。

服を脱ぐ為に、氷を洗面台の横に一旦置いた。そこに置かれた氷は愛犬よりも可愛く見えた。これ程までに氷を愛おしく思つた事はない。

服を脱ぎ裸になつた俺は、痛み出した唇に氷を当てた。当然痛みは和らいだ。だが次の瞬間だつた。溶け出していた氷は指先を滑り、洗面台に飛び込んだ。

湯船の中にも氷を持ち込むつもりでいたが、流石に落ちた氷は唇に当てたくない。俺は諦めた。だが次の瞬間、一旦諦めた氷を拾お

うと俺は手を伸ばした。氷を掴む前にその手は止まる。どうせ溶けるんだから拾わなくても良いじゃないか、ここは洗面台だぞ…

さっきまで愛おしくあったそれは、洗面台に落ちたことで、一瞬にしてゴミと認識されていた。

新たな氷を取りに行くのは面倒臭かった。伸ばしかけた手を引っ込め湯船に向かった。

ふう〜

湯船に浸かると湯の温度と心地よさもあつてか、微妙に痛みが和らいだ。だがそれで脳も油断した。

気が緩んだ俺は指先で摘むようにして両目を掻いていた。それが俺の癖なのかもしれない。普段なら何気ないことだった。

だがすぐにそれは襲ってきた。痛い、目が痛い。指先を見つめると真つ赤だった。奴だ…奴はまだ生きていた。自分に催涙スプレーかけた俺、アホか…

俺は半身を乗り出しシャワーを掴むと冷たい水を目に当てた。水が当たっていれば痛みを感じることはなかった。目を洗いながら学校のプールを思い出した。

しばらくそれをやっていると目の痛みは若干取れてきた。

髪も濡れたことだし、ついでに髪を洗おう、そうしている内に目の痛みは無くなるだろう。

そう思っただけで俺は目をパチパチさせながら湯船から出た。

そこで俺の人生は終わった。こけて…死んだ。

俺は目を覚ました場所で数年振りに爺さんに会って、俺の身に起きたことを話した。

すべてを知ったじいちゃんはいった。

「灯牙らしい死に方じゃな」

(J)

（後書き）

ボツネタってラスト以外は実話っていう…
エッセイじゃねえかつ！って思ったんで、
無理やり俺を殺した。いや無知って怖いねw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5503f/>

ボツだもの宣言 その1

2010年10月10日07時05分発行